

「深い事例研究－‘お話し療法’あるいは‘煙突掃除’の視点からの検討」

Intensive case study –discussion from a stand point of ‘talking cure’ or ‘chimney-sweeping’

衣笠 健作

KINUGASA Kensaku

(1) はじめに

筆者¹⁶は「聴くことの意味」において『聴く』という本質について検討しており、「患者の心を理解するために聴く」ことはクライアント（CI）の内的世界を細かなところまで理解し、CIとセラピスト（Th）の描くイメージを一致させることであると述べている。それはロジャーズ²⁹、フロム⁵、村瀬²⁴なども述べている。一方で、フロイト⁹がいう「我々はただ耳を傾けてさえいればよい、何に注意したらよいかということには気を遣う必要はない」、ロジャーズ²⁸の「カウンセリングと心理療法」における「非指示的療法」など、本来の意味とは異なり、Thが治療的に聴くことができない言い訳として利用しているところもある。心理療法について、その侵襲的痛み¹³を治療者が抱え、関わっていきけるかが重要であり、受け身の姿勢であっても技法として介入し、積極的に聴くことができない治療者の態度を指摘している研究者は多い^{12,5,14,32}。Thが漠然と聴くのではなく、CIが何度も繰り返す言動に焦点をあてて、聴き尽くす責任がThにはある。フロイト¹⁰はヒステリーの研究報告の中で、「情動を欠いた思い出には、ほとんどの場合全く何の作用もない。すでに過ぎ去ってしまったもとの心的行程が可能な限り、生き生きと反復され、それが生じたときの状態に戻れ、そしてそれについて語り尽くされねばならない」と述べている。「語り尽くす」ことの効果は、アンナ・Oの事例の中で、‘おしゃべり療法(talking cure) または‘煙突掃除(chimney-sweeping)’と表現されており、抑え込む力を受け動けなくなった情動が詰まり、それを‘煙突掃除(chimney-sweeping)’することによって、放出させることを意味している。心の内に抑え込まれ鬱積した気持ちや思いが、動き出し、語り尽くされるのが心理療法の原点なのである。心理療法のどの諸理論においてもCIの理解のために語ってもらう技法があり、安心してCIが生き生きと語り尽くせるように治療構造がある。筆者は、精神分析家、ロジャーズ派、行動療法家といった確固たる理論を名乗れる立場ではない。ただし、CIの言動の裏側では、どんな体験がされ、感情が詰まっているのか、精神分析的にいう無意識や背景には何があるのかという関心は常にもっている。

心理療法を行う際、治療がどんな枠組みの中で行われてい

るかは、ThとCI両者にとって重要であり、「その構造の中でどの程度、自分が動くことができるか」²⁵、動かされるかは変わってくる。治療構造において、渡辺³³は「どのような『関係性』(心理療法的関係性)を、臨床心理士は、CIとの間で実際に作り出すことができればよいのか、について明確にしておかなくてはならない」といっている。坂井・松下²⁶も指摘している。つまり、どのような語る舞台をつくることできるかは、Thの責任であるといえる。

本論文でとりあげる事例は、筆者が機関（大学内心理センター）に雇われ心理療法を行う構造と、CIの大学卒業・就職を機に、直接筆者とCIが契約し、金銭を手渡して受け取る構造の両方を体験した事例である。何らかの機関に雇われて心理療法を行うThが一般的である中、自分の自宅やオフィスではないが（医療機関の心理室）、直接金銭をやり取りする治療契約をもつことは、心理療法の構造の違いによって、Thの治療者としてCIへ関わる態度が変化し、それに伴いCIの語る内容がどのように変化しているか、Thが心理療法を見つめなおすきっかけとなった。

治療構造について栗原²⁰は「物理的」「人的」「社会的」という3つの軸から立体的に把握し、臨床的な関わりを支える構造を描き出している。「物理的」な領域には場所や時間が含まれ、「物理的」と「社会的」の中間域に料金や連絡の取り方がある。「人的」領域にはThの態度や理論、人格的要素が含まれている。心理療法において直接お金を手渡して受け取るということは、「お金はCIの痛みが確実に具現化されている」¹⁹ため、その痛みを受け取ることや、CIからの「私を治して」という純粋な眼差しに晒される緊張感がThの内に起こり、より「生々しいもの」¹⁹となる。お金はまた「セラピー空間の終わりを提供する」¹⁸というように、現実に戻る合図でもあると同時に、筆者にとっては、この料金を、語ってもらえただろうか、十分な‘煙突掃除(chimney-sweeping)’ができたかどうか、解釈ができたかどうかと、自問自答する振り返りの時間になる。金銭がThの心に影響を与えることは多くの臨床家が述べている。この事例においてもThを落ち着きなくさせ、「治療」について考えさせる原動力にもなった。筆者は、CIから頂いたお金を、CIの‘煙突掃除(chimney-sweeping)’ができたと思えるようになるまでの間、使用せず、家族にも言わず大切に隠し持っていた。

面接場所においては、大学に初めて心理センターが設置され、最初の Th として雇用されることにより成果や評価を気にしたり、大学教員からの依頼に品定めをされるような感覚を心のどこかでもったりと、Th の肩に力が入る環境であった。一方で医療機関の心理室は、機関に護られている部分はあるが、筆者の慣れ親しみ裁量度が大きく、管理・コントロールできる空間である。その空間では CI が扉を開けて入ってきた瞬間から、第三者を意識することが少なく、「より直接的で皮膚に近い体験」⁶「Th の延長ないし感覚器官としての機能」¹⁹に近い体験をすることになった。その Th の心のゆとりの違いは、CI との関係性、語りに影響を与えると考えられる¹⁹。

面接頻度については、筆者が多くの場面でを行っている心理療法面接は、週に1回から隔週で対面法を基本としている。その場合、外界での出来事や対人関係を媒介にして心のありようを語ってもらうことが多い。栗原¹⁹は「個別的な問題は、そこにその人の人生の大半をかけて積み重ねられた重みがあるものではあるが、いわばそのより深い問題の端緒にすぎない」といい、その端緒を丁寧に扱い、Th を羅針盤にして深い問題を見つめていく作業をすることを示唆している。北山¹⁷は「実体をもった外的現実をそれとしてとらえたうえで、無意識との関係を理解する姿勢というのが週一回のセッション療法ならではの在り方」という。衣笠¹⁵は「対面法では視覚が加わり現実的で力強い交流が生じ、内界の幻想だけに集中しにくい。そして患者の投影に応じた治療者側の情報表出も避けがたい。治療者がそれらをコントロールし、内界志向に維持できれば、患者へのインパクトは大きい」、さらに「週一回の治療においては転移逆転移の把握が難しいこと、治療外でおこっていることの理解と介入が必要であり、また治療外の対象関係における防衛分析を中心とした介入や解釈の必要」と述べている。つまり現実的な問題を入口にして心の動きの可能性に Th が心をめぐらせ、より深い問題に触れていくことを狙って介入していくことが、CI の詰まった気持ちを放出することを伴った‘煙突掃除 (chimney-sweeping)’につながっていくともいえる。松木²²は心理面接の頻度は問わず、心の問題に触れるためには「free floating attention の状態でサーチライトのような注意を自由に漂わせて無意識的な不安を感知することに始まり、無意識の文脈を読み、今ここの照合もおこないつつ、解釈してつなぐ」といっている。現実と無意識をつなぐ‘煙突掃除 (chimney-sweeping)’をするのである。

CI の語りを聴き、受け取るとき、Th は「みずからを人工

的に盲目に」²¹し、CI の声にならない思いを Th の「もの思い reverie」³によってコンテインし、意味ある言葉に変形して CI に戻すということを Bion,W²¹は「アルファ機能」といい、CI が考えることを促進すると述べている。これはフロイト⁹がいう「差別なく平等に漂う注意」をはじめ、大石²⁷の「CI とかかわっている自分にちょっとした違和感」、ロジャーズ²⁹の「Th の内臓レベルで体験されていること」を通して、CI を語り尽くす方向に促すと考えられる。妙木²⁵も「思い浮かんだ治療者の理解を思いついた時に伝える」、Jacoby¹¹も「一人の人間として反応し、考えたことや感じたことなどを伝えゆく」といっている。藤山⁶は解釈について「Th の心に生まれた何らかの考えを『解釈』と呼び、それを音声で実際に語られることを『解釈する』と」いい、知的なものとは、知的なものとは区別している。また、森²³は CI と Th が「共に体験している治療構造の綾をたぐり寄せていくと、いっそう鮮明に見えてくるものがある」といい、Th の小さな声も含めた感情にこだわり、CI と Th が情動をとまなう体験を共有できるような関わりを行っている。小此木²⁶がストロロウの言葉を引用して「患者の体験に近いものに治療者は近づこうとすることだけしか治療者はできない」と述べていることに通じる。Th が心のなかで「あれっ？」と思ったり、「よくわからないな」と思った時、その CI の「曖昧さのなかにこそ患者の秘密、重要な何かがあるということだ」²²というように、CI が触れたくないことが含まれ、まさに煙突の詰まった部分であり、抑えこまれた気持ちが鬱積したところである。

藤山⁸は Bollas,C を引用し、ひたすら聴いて「一部分患者になることを含む受容性」と、CI と「距離をとって理解すること」を、「母性的モード」と「父性的モード」といい、この二つのモードが両輪のように機能することが必要であるといっている。この二つの側面が、煙突の中をじっとみつめ、抱え込み、CI が語り尽くし、CI 自身が煙突を掃除することを手伝うことになる。しかし、Th が知的に解釈を与えようとするのではなく、CI との関係性の中で自然と思いつかぶものを利用し、‘煙突掃除 (chimney-sweeping)’をしてもらうことが、患者の体験に近づくことであり、CI 自らが、‘煙突掃除 (chimney-sweeping)’をできるように促進し、パーソナリティを進展²¹させることができる。

これらのことは簡単なことではなく、日ごろの歩き方でない歩き方で歩くことほどの難しさを伴うが、「治療の成果は、必ずしも目に見えやすい形をとるわけではない。」¹⁷からこそ、精神分析であろうと、認知行動療法であろうとも、「話

をしている」ことに対して介入するスキルを意識的に使い⁷、「心理療法家たちがいったい自分は何をやっているのかということをはっきりさせないと」¹²いけない。また、柴山³¹が「人の心が千差万別であり、それぞれに独自の世界をもっており、解決を望まれる問題は種々雑多であり、しかも、心理相談の内容の種類と程度、原因と目的は複雑多岐にわたる」というように、多様化する現代社会において、治療と相談、遠隔と対面、心理療法においても曖昧になってきている。臨床心理士は、自分の言葉をみつけるための土台となる技法や態度を考えておかないと、治療がどうかかわからない世界に、ThとCIで迷い込んでしまう。

本論文では、事例を通してCIが語り尽くすための舞台としての、料金、場所、頻度といった物理的治療構造が与える影響、特に手渡しで料金を払う、受け取ることにより、ThとCIの心のあつかい方、見つけ方が変わり、Thの想像（解釈）の質が変化することで、CIが語るだけではなく、情動を伴った‘煙突掃除(chimney-sweeping)’を行い「語り尽くす」ことになることを検討する。そしてCIが考え感じる‘煙突掃除(chimney-sweeping)’をする力を身につけるためには、CIの言葉を使いながら、Thの想像、違和感（解釈）を提供し、『間』をもって考え、そのThの考える姿、時間から自然にCIが自分の煙突の奥に入っていく、つまり問題を見つめてもらう体験を繰り返すことが必要である。その‘煙突掃除(chimney-sweeping)’の力が、CIが語り尽くすことであり、自己を理解し変容させる効力がある心理療法の土台ではないかと検討することを目的とする。

(2) 事例概要

CI：Sさん 女性 22歳（面接開始時X年）

主訴：人間関係が苦手・家庭のこともあり自分が変わりたい。

過食嘔吐。

学歴：X+1年3月 某私立大学卒業

家族構成：父親（自営業） 継母（主婦） 本人 弟（同父－1歳） 妹（継母連れ子－7歳）

生活史

4歳のときに両親が離婚、小学校5年のときに父親が再婚。実母との間に自分と弟、継母の連れ子として妹ができる。小学校3年生のとき、実母が実家にきて祖母を押し倒し、首を絞めるところを目撃している。現在、実母との接触はない。継母が本人に対して、実母は借金や片づけなどだらしがな

く、ごはんなどもできなかったという情報を伝えている。小学校5年時に、父親と継母の情事を本人が目撃し、気持ち悪い体験をしている。お風呂に継母と一緒に入ったとき、継母より「お母さんと呼びなさい」といわれ怖かったと述べる。ごはんなども「やってあげている、食べなさい」といわれることから、継母の愛情を否定的に受け取る。また本人は、中学校より柔道をしており、地区優勝などをする実力をもつ。

過食嘔吐は大学1年生の冬から始まり、どのくらい食べていいのかわからなくなるが、体型が気になるため、過食後に指をつかって吐く行為を繰り返している。X-2年には過呼吸をおこし精神科のクリニックにかかり、服薬をした経験あり。大学4年時、ゼミの担当教員より筆者を紹介され来談する。

(3) 面接経過

1. 構造

90度法によってX年11月カウンセリング開始。カウンセリング導入から#40までは大学施設内のみ、Thの雇用契約により隔週、一回45分。その後、Sが卒業し、就労しながらもカウンセリングをできる限り回数を増やすために、ThとSさんの予定が合う限り基本的に週に一回行う、そのために大学施設内とThの勤務する医療機関の心理室で勤務時間外にカウンセリングを並行して#97回まで行う。Thと大学の雇用契約の都合により、#98回からはThの勤務する医療機関（勤務時間外）で基本的に週一回、45分で行う。大学以外での機関では治療契約を個人で結び有料で行う。大学施設内では在学中は無料、卒業後は規定の料金を施設に払っていた。

面接期間：X年11月～X+8年7月（全205回）

X年11月（#1）～X+2年6月（#40）まで

：大学施設のみ（基本隔週／施設に対して在学中は無料・卒業後は有料）

X+1年11月（#22）後に一回のみ単発のSV受ける。

X+2年5月（#39）より定期的にSVを受ける。

X+2年6月（#41）～X+4年3月（#97）まで

：大学施設＋個人契約（できるだけ週に一回基本／個人契約ではThへ直接料金を支払う）

X+4年3月（#98）～X+8年7月（#205）

：個人契約のみ（基本的毎週／料金はTh個人へ）

I期【導入期・自己紹介的語り】(# 1 ~ 20)

CIのゼミ担当教員より紹介され、筆者が心理療法を行う大学内の相談施設に来談する。CIにとってはじめてカウンセリングを受けるということもあり、大きな目を見開いて肩を丸め、緊張を必死に抑えながら入室してくる。初回面接では、継母との関係を中心とした親子関係、大学4年生であるがまだ就職が決まっていなくて心配していること、大学1年から、多い時で白米3合に加え、おかしとパンを数個を食べ、吐くという過食嘔吐をしているため体型が気になっていることを勢いよく語る。その姿は、不快な想いをいっきに吐き出す様であった。

親子関係のエピソードとして、過去に継母、義妹、CIで大型ショッピングモールに行ったとき、CI「(継母に)買い物に行く?と誘われ、店につくと、好きなどこ行っていいよと言われ、放置され、他人的に感じた」(# 3)、「継母と暮らしはじめ、『ごはん食べれるでしょ』とてんこ盛りにいられる。『おなかいっぱい』といってもダメといわれ、その扱いが義妹とちがった」(# 3)、CI「継母は遠いけど、ズカズカ入ってくる感じ、母親と思って関係を築こうとすると崩され、手紙あげられ、部屋で泣いていた」(# 3)など語る。親子関係を中心とした話の中で、ひと通り吐きだし、吐いたものを見つめなおそうとするThの質問に対して、「わからない」「覚えていない」ということが増えていく。父親に対して、CI「離婚した方がいいんじゃない?父も私も幸せ、縁をきりたい」(# 20)、CI「休みの日に父親とどっかいきたいが、継母と会いたくなく、実家にもどれない」(# 20)、「実家のことを考えていると、モヤモヤして、過食嘔吐をする」(# 20)と自分で症状と実家を関連させている。父親と継母と自分の関係のなかのネガティブなエピソードを聴いた後、CIの困った顔をみると、CIの一言ひとことにThとして「傷つけてはいけない」、「CIが語る継母とは逆の優しい人にならなければならない」、「単純に聴くだけでいいのか」、「プロとしてもっと的確な解釈をしないといけない」というような感覚になり、Thとして中立性がたもてなく、Th-CI関係がギクシャクしている距離感であった。就職は、某児童福祉施設に決まる。

II期【欲望に突き動かされ、'矛盾した'異性関係】

(# 21 ~ 57)

Thが相談施設に対しての成果をあげたい思いや、治療者として何もしていないような物足りなさ、CIの心に詰まっているものに触れる不安などを感じ、この時期よりSVを

受け始める。CIはカウンセリングで自分の問題を見つめ始め、職場での人間関係、原家族との関係において落ち着かなく、過食が頻繁に報告される。またThとの関係での欲求不満もあったと推測され、Thにとっては唐突に異性関係の話題が出始める。ゲームアプリで再会した人(# 21)、よく知らない歯医者に誘われる(# 42)、大学時代の知り合いとクラブに行く(# 47)、ネットで知り合った男性と昼食をとる(# 52)、出会い系アプリで男性と知り合う(# 52)など、CI「満たされない人間関係ばかり」(# 47)と自覚しつつ行動をしている。異性関係の話題から、幼少期に目撃した父親と母親の情事についてカウンセリングで考え(# 21)、CI「行為の気持ち悪さ」(# 21)、CI「父親が下着でウロウロしているすがたの気持ち悪さ」(# 21)、「父親に襲われ性交渉を受け入れる夢」(# 22)、CI「知らない人が本屋でエロ本を読んでいる姿が気持ち悪い」(# 41)と異性への嫌悪感をしめす。一方では近寄り、裏では嫌悪感をもつという矛盾の中での行動がみられた。父親との性交渉の夢はCIよりもThにとって衝撃的であり、触れることができないでいた。

身近ではない異性関係では積極的に行動ができる一方で、職場では、CI「輪に入っている感覚がない」(# 42)、CI「人間関係のこと考えると霞がかかっている」(# 44)、『ポツン』(# 44)を感じる。

CI「こうなりたくない実母、理解できない継母、母親ってなんだ、どっちも母親でない、ずっと人恋しい、家族が欲しい」(# 56)とまとまらない心の想いをそのまま言語化することによって、CI「帰省時に自分から継母と距離がとれるようになってきた」(# 57)と継母とのいい距離感を探り始めている。

III期【現実と過去の混在を意識し、自己をみつめる時期】

(# 58 ~ 100)

福祉施設である職場で、援助対象の児童とのトラブルを機に、母親への気持ちが混ざり、CI「人間関係全般に責められるような感覚、怖くて近寄れない感覚でポツンとする」(# 58)のを感じる。Thとの間でもCI「崩れたときに受け止めてくれない怖さ」(# 58)を語る。またThが料金について話題にとりあげ、CI「お金へのこだわりがなく、払うことに拒否感もない」(# 58)と語る。CI「お金とか現実を考えずにフワフワしたままの方が、スラスラ話せる、とぎれる関係に思うと怖い」(# 59)と関係性が深まることへの不安を言語化する。職場での人間関係に継母への気持ちや、高校での仲間外れされた体験が重なることを味わい、CI「自分

に問題があったのかもしれない]「男の人に走ってしまう、だらしのない実母のように、何かに頼るのは依存、汚くみえる」(# 59)と語る。そのような状況の中で、「ネズミ講ブランドの会社」(# 63)での人間関係や、SNSで人と知りあい、「人にふれたい甘えたい」(# 63)を満たそうと積極的に行動する。一方で、CI「信じきれないモヤモヤ」(# 63)も感じつつある。

義妹の大学進学にともなう引っ越しの準備をみて、姿見が自分のときはなかったと、はじめて「嫉妬」(# 64)という言葉を出す。妹の話からCI「対人関係に自分が壁をつくってポツンとしてしまう」[父親に話しても通じないし、怖い、心臓がぎゅゅとして、身近に感じない壁ができる](# 66)と対人関係の壁について見つめる。

カウンセリングに遅刻すること(# 67)が続き、その心の動きをThが数回にわたってしつこく聴いていく中で、ネズミ講ビジネスに対してのThの態度が否定的であったり、福祉施設を辞めたくなっているCIに対して、あまりよく思っていないThの態度に『Thとのズレ』を感じていた。さらに考えてもらうことで、CI「期待している反応がないと傷つくのが怖い」(# 68)、CI「人と近いのが気持ち悪い、思い出すのは、お父さんとお母さんがベタベタしたのをみたことあって、情事だけでなく仲がいいのも」(# 73)といった、父親と母親と自分の関係性をみつめはじめる。カウンセリングで起きていることの心の流れから、親転移をThにむけていることを、ThとCI両者が理解し、治療関係を深めることになった。

継母方祖母の葬式で帰省し、CI「継母が妹の一人暮らしのところには遊びに行くのに、私のところにはこない」(実家から)妹が大阪に戻るとき電車代を渡しており、自分には名古屋だから近いからいいよねと」(# 84)など、継母の義妹と自分との扱いの差を感じつつも、CI「他人同士で踏み込めなく、私が割り切ったのかもしれない」(# 84)と、細かなニュアンスの違いを言葉にし、体験している内容が変容してくる。CI「カウンセリングが終わってから不安定、自分がコアのところにはふれたいのと、消そうとするのと、人とつながり感じない、苦しくてもそこに触れたい」[私が感情ぶつけることから逃げている、嫌というところが見えると拒否しちゃう]「私は関係築けないうえ、勢いで行動している」[継母と妹のコソコソ話が職員との関係に重なる](# 85)など自分の問題として見つめている。

父親と継母と私という関係性の中で、父親に言われた「精神的に弱いから伸びないんだ」(# 86)という一言に対して、

CI「何もみてないじゃん」(# 86)と初めて父親にぶつかっていく。Thの「継母のイメージが少し変化した?」という問いにCI「美化されすぎかもしれない」(# 91)と、距離をとって考え、実の親子と継母と私、性別の違う父と娘といった立ち位置の違いなどに気が付き始めている。

過食に関しても、出来事と気持ちとつなげ、CI「劣等感や相談することができないこと、過食のときは一人な感じ、ポツンすらわからなく、地に足がついていない感覚」(# 95)を語る。

Thとの間で、キャンセルをした後、CI「昔から一人になる、矛盾している、切っちゃう、どうしたらつながるのか、かかわるほど疲れる、距離おいて、初対面が楽」[キャンセルしたとき]Thの気持ちは考えなかった。私、中身がない、埋めるために突拍子もなく動いてエンジン全開になる」(# 97)とカウンセリング内で起きていることを通して、対人関係全体をみることができている。さらに、そこからCI「ふと思いだすのはお父さんとお母さんを思い出して、どっちからもつながり感じるようなやりとりされてない、されてるかもしれないが自分から切っていること思い出した」(# 97)と親子関係の中での見つめなおし、体験の修正がすすむ。

Ⅳ期【CIの外界の捉え方が変化しはじめる】

(# 101 ~ 144)

大手自動車メーカーに期間工として転職することにより、CI「ねずみ講的ビジネスなんてなんでしてんだろう」(# 101)と冷静に物事を捉えることができるようになる。工場ということもあり、近すぎない人間関係のなかで重ってくる親子関係を相対的に見つめはじめる。

CI「腕を組もうとする継母」[私と継母をくっつけようとする父親の動き](# 102)を夢でみたりするようになる。帰省時に、CI「継母と父親のやりとりが、コミュニケーションをしっかりとっていた、ネックレスを父親が継母に買ってあげたり」(# 103)と夫婦の仲のよい関係を感じ取った後、事故を起こしたり不安定になる。事故をきっかけに継母と連絡をとり、CI「多分、継母は真正面からぶつかってこようと、私に向き合う気がなく、反発の気持ちになる」(# 104)と自分の心のフィルターの問題をみつめ、継母への見え方が変わってくる。父親、継母、私での旅行(父親の社員旅行)においても、継母と一緒にマッサージを受けたりする近さに戸惑っている。その影響で、カウンセリング予定のない日にまで来談し、後日CI「継母のことを意識しているとThに言われ、

ざわついて、とても自分にも腹立ったし、話したかった」(# 107)と情緒的に揺れ動いているのがわかる。生々しい感情を感じては、次のカウンセリングではCI「継母のことは何も思い出さない、何話していました?」(# 107)と、記憶にないという。または「今頭にはいってこない、聴いててぼーっとする。違う話題を出そうとする自分がある」(# 108)と、CI「コントロールできない怒り」(# 107)、「片隅で母のことなんだろうな」(# 108)と心から継母への気持ちを締め出したり、感じたりを繰り返す。この揺れ動きに堪えている様子が伺えた。

父親の態度にCI「不器用な父親で、私と似ていて、喧嘩してすれちがって、心配して、嫌だと思うが親子のやりとりとしてじっくりした」(# 111)と理想とは違うが、自分なりに適度な距離を取ろうとしたり、良い体験として感じたりすることもできている。

この頃になると過食も変化し、CI「手当たり次第ではない、おなかいっぱい感じて、詰め込んでいる感じ」(# 117)とコントロールが利き始める。過食を報告すると同時に、背景にあるものを語る。

職場で知り合った5歳年下の男性(Y)と交際を始める。この時点では、親との関係を埋めるための異性関係の延長である。Thが父親と継母の情事を目撃した体験と、異性関係をつなげて介入をする(# 119)ことにより、CI「父親と母親の話を読まれると、涙が出る理由を知りたい、先にすすみたい」(# 121)と語る。そして自分の恋愛からCI「父親と母親の恋愛のころがどうだったのか」(# 122)、自分の性行為から、「無意識に父親と継母を思い出し、かき消している。Sexしている感覚がなく、興味なくなったり、受け付けなくなったりしている」(# 122)自分に気が付き、CI「父親と継母の情事、好き同士とみたくなかった、二人でならんで帰ってくるの、嫌で、迎えに行くと、二人が仲良さそうで、ポツンとなった、さみしかった」(# 123)と、心にしまっていた感情が浮かび上がってくる。

CIと恋人の関係から肉体関係の意味をThがなげかけ(# 125)、CI「継母と父親だけでなく、実母と父親の情事を思い出し、さらに、父親と私が仲良くしているところを実母にひっぺはがされ、実母と父親がくっつくことがあって、えっとなった」(# 126)ことを思い出している。

父親、継母、CIにYが加わることにより、家庭内の力動の変化をThが想像し、問いかけたことをきっかけに(# 130)、CI「気を使って、もっと大切にしてほしいのが父親を重ねてしまう」(# 131)ため、「物足りない」(# 132)、

だから過食し、「一番甘え足りないのが過食につながる」(# 133)と言語化し、異性関係や過食が親子関係を埋めるものであることを自覚する。YとCI「やりとりして手ごたえある、向き合いはじめていて、過食もない」(# 135)、Yとの心理的生活を変え始める。異性関係の意味が変わり始める。また、職場での人間関係においても、不安を過食でごまかさず、記憶にとどめておくようになる(# 138)。

実家近くに住む弟の結婚が決まりCI「自分が家族と近く感じない」(# 139)と家族と自分との間に溝を感じ、それが職場の人間関係でも「意地悪」(# 139)に感じたり、CI「自分がよくない人間で、とりえのない実母と同じ」(# 139)など極端な思考になることをカウンセリングで話す。

保留になっていた、Yとの同棲の話題をCIがYに投げかけるが反応がまいちであり、CI「マイナス思考になってしまふ、不安」(# 140)と言う。CI「話して安心するが時間たつと霏がかかってわかんなくなる、嫌われないかどうかという霏」(# 141)。自分の内面を感じ、過去と現在といたりきたりしながら、Yとの関係が深まっていくにつれCI「自分が人生歩んでる感じして、父親をとられる嫉妬はだいたいなのかな。仲良くも悪くも、継母と父親がいて、そこに私が帰る場所があるかどうか不安」(# 141)と、家族のあり方が変化する。

V期【異性と付き合う意味が変わり、両親と対等になるためのユニットとなる】(# 145 ~ 197)

結婚を前提とした準備をYとともに始める。CIと父親との間でおきている心模様にThが焦点付けたり(# 145)、今までの異性関係との違いをThに問われ、CI「ネットの人は夢みたいでフワフワしていたけど、Yとは現実味があって、自分の感覚がある。だからイライラするし、見ることができる。Sexも今までは、心の穴埋め、黒く、怖い、孤独をみないためのものだった」(# 146)と異性関係の意味を明確に語る。またYとの日常生活から刺激を受け、CI「夫婦喧嘩は自分のせいだと思っていた」「継母が妹を守り、父親が私を守らなかったさみしさ」(# 147)など、心の奥底で漠然とごもっていたものが語られることで、再度現実のYとの関係を見つめCI「親に求めるものがYとの関係にまじり」(# 148)、「Yは私が思っている以上に理解してくれる」(# 151)感覚と「Yとつながっていない」(# 152)感覚との間で揺れ動く自分を体験する。CI「私をもっとみて」(# 157)とYにぶつけ、ぶつけられるYも変化しはじめ、CIに言い返したり、家事を手伝うなどの反応をしめすよう

になる。Yと生きた体験を繰り返すことによって、CI「自分をみて！が減って、過食も減り、自分の時間をみつけたり、Yに伝えるようなことを親ともしないと」(# 158) といった、自分が向かって行く方向が見えていくようであった。この時期並行して、弟の海外挙式でよい家族体験をし、CI「今までの過去が、嘘だったんじゃないかと思えて苦しい」(# 155)、「今までの継母が崩れた。形がなくなった」(# 157) と関係が修正されていく体験もしている。

Yとの間での「私をみて！」にはCI「妹と継母と一緒にやっているようなことをやりたい」(# 166) という理想像があり、それとズレるYに苛立ち、満たされずにいる自分に気が付くことで、「継母とYは違って、Yは近寄ってきてくれる」(# 166) と、似ているところとそうでないところを確認でき、極端に傾く心に楔を打てるようになる。さらに今まで記憶に蘇らなかった実母とのエピソード「実母はケーキをつくってプレゼントに服選んでくれた」(# 166)、「父親と継母が手をつないで帰ってきた時から壁をつくった」(# 166) 感覚、「父親とじゃれているとき、実母がひきはがしにきて怖かった、とられる感じだった。女を感じ、実母と父親の情事もみて、気持ち悪かった」(# 170) という生々しい情緒を伴った内的体験を語る。某大手自動車メーカーの正社員登用試験に合格(# 171) し、元銀行員の継母、学歴優秀な妹、しっかりした弟と対等になり、自分も「できないことはない」(# 172) と自分に柱ができる。

正社員になれて「正社員になれたこと、継母にほめてほしい、妹と比べられるのが怖い」(# 181) という気持ちをかみしめ、親に伝え、うまくいく体験をする。そしてCI「私たぶん継母だけでなく、父親への怒りもあった」[「父親と継母の関係とは違う、私とYの関係をつくる」(# 181) と自立していく力強さがでてくる。揺れ動くなか、CIが語るYとのCI「不安定で安心できない」(# 184) 関係と、ThがみるCIとYのTh「しっかりした」(# 184) 関係にズレがあり、Th「Thとのズレ」(# 185) についてもとりあげている(# 191)。

社宅、親へのあいさつなど現実の問題を適応的に行動しているさなか、Yとの金銭的トラブルからCI「怒りで過食しようとしたが、痛みは消せないをやめた」(# 195) と痛みを感じ、CI「びったりイメージは重ならないが、Yとどうすり合わせていくか」(# 196) と現実的な妥協点を見つける心の柔軟さを感じられた。

Ⅵ期【妊娠を中心とした家づくり】(# 198～205)

X+8年4月、Yとの間に妊娠が明らかになる。Yとの

関係は、カウンセリングではネガティブなことが主であったが、Thが訊ねるとCI「もやもやもしていたけど、楽しいこともあり、肉体関係もあった」(# 198) とCI「迷いのなかで受け入れ」(# 198)、妊娠にいたる心の動きを細かく振り返る。Thとの関わりを土台に、Yへの伝え方がしっかりすることで、Yにも気持ちが伝わり二人での家づくりがはじまる。CIにとってYとの関係に対して様々な選択肢があるなか、CI「Yは約束も破るけど悪気はないし、受け入れていく」(# 198)、CI「自分の子ども、愛おしい」(# 198) とポジティブな受け止め方ができ、胎児や子供を含めたYとの家族について想いにふけている。親への報告も堂々としており、親も喜んでサポート体制を約束している(# 199)。親との関係を振り返る中、CI「全部が怖いではなく、妹との差を感じる時だけが怖い。あとは普通」(# 199) と答えている。また、父親が血のつながった孫を喜んでくれたことを、義妹にはない優位な自分を味わっている。さまざまな体験をCI「ちゃんと感じて、受け止め、言葉にできるようになって、過食もなくなり、自分が変われば他人とも関係をつくれる」(# 200)、CI「ものの捉え方が変わった」と語り、カウンセリングの中で、いろいろな気持ちを見つめ、受け止め(自己受容)することで、実家との関係の現実的な関係の再構築をし、これからの自分の家族へのポジティブな想いを抱きながらの決断である。ThはCIのPersonal Changeを感じ、終了時期を話し合い、今までの課題や変化を念を押すようにCIが語り、Thが思い出すことを繰り返した。振り返る中で、過去のCIの姿を思い浮かべ、Th「私の中の傷ついた女の子は?」(# 204) という自然に出た言葉に対して、CIも違和感なく理解しCI「消えたというか、過去形になった」(# 204) と嘯みしめながら答える。Thの解釈に対して、その都度、的確な想いを語る。同時に二人で住むところ、お金の問題、実家との距離感など現実的な問題を自分で考えてこなすじつかりとした顔と、胎児のことをもの思う母親の顔になっていくのをThは感じ、安心して送り出すことができた(# 205)。

(4) 考察

治療構造の視点から

①料金を手渡しで受け取ること

カウンセリング料金をThがCIから直接手渡しで受け取ることへの治療構造の変化は、さまざまな面でThとCIの治療関係に影響を与えた。まず、両親の性行為を目撃したことについて、治療の初期、Th「父親と継母のこと、性行

為をみていたが、そのことで思ったことを教えて」(# 21) と情動を聴こうとするが、CI「行為の意味はわかんない。気持ち悪さ、男性の裸が気持ち悪い」(# 21) と強調され、Thはその生々しい話題と言葉に圧倒され、一步奥の‘煙突掃除(chimney-sweeping)’のためのCIの自由な思考を促したりする余裕がなく、CIの気持ち悪さをわかったような態度をとり、CIの自由な語りを止めていた。CIが料金を財布から抜き、Thに手渡しで払う姿を見ることによって、ThはCIが語り尽くせることを優先に考えはじめ、Th「事故と夫婦の仲がいいこと」(# 104)、Th「父親と継母のsex、ネックレスのプレゼント」(# 103)、「父親と母親の情事と自分の異性関係」(# 119)、Th「継母が嫌でなく、父親が取られるのが嫌で、自分の恋愛と両親が仲のいいのを重ねる」(# 125) というように、その都度、異性関係、肉体関係、親子関係を関連させ、気持ち悪さの奥でくすぶる情動を訊ねるようになった。そのThの変化によって、CI「父親と継母の情事、好き同士とみたくなかった、二人でならなくて帰ってくるの、嫌で、迎えに行って、二人が仲良さそうで、ポツンとなった、さみしかった」(# 123)、CI「継母と父親だけでなく、実母と父親の情事を思い出し、さらに、父親と私が仲良くしていることを実母にひっぺはがされ、実母と父親がくつつくことがあって、えっとなった」(# 126) という「父親をとられる嫉妬」(# 141)、「父親をもとめて、そこを埋めれないさみしさ」(# 204) といった、新たな記憶と情動が浮かび上がってきた。このより深い部分の語り‘煙突掃除(chimney-sweeping)’ができることによって、「気持ち悪い両親の情事」の意味が、「両親の性の気持ち悪さ」から「嫉妬やさみしさ」へと修正されていった。

キャンセル料やCIが遅刻した時に、満額受け取るThの違和感、つまり時間はあけているがカウンセリングをしていないのにお金をもらうことに、CIは何を感じ払っているのかという疑問がわき、Th「お金を直接Thに払うことで、さまざまな感情がでてこないか?」(# 58) と訊ねると、CI「お金へのこだわりがなく、払うことに拒否感もない」(# 58) と応える。続けてCI「お金とか現実を考えずにフワフワしたままの方が、スラスラ話せ、とぎれる関係に思うと怖い」(# 59) と語る。キャンセルや遅刻に対して、CI「掃除していたら時間の感覚がおかしくなって」(# 68) というCIの理由を聴いても、治療初期は、そういうこともあるかとThの心のひっかかりを見て見ぬふりをしていた。個人契約以降、Th「それもあるけど、もっと教えてくれない?」(# 68) とThがCIの不在の時あれこれと想いにふけることで、対

面時にCIの持ってくる言い訳に対して、その背後の心が気になった。実際、Thにとって時間が空いたから他の仕事をしようという気分にならなかった。Thが想像することを訊くことで、CI「期待している反応がないと傷つくのが怖い」(# 68) と、人との繋がりにくさや、自分の生々しい心に触れることの困難さを実感していく。CIにとって義務的に払うことはとぎれる関係であり、払わなくてもカウンセリングしてくれる、私のことを見て欲しいという強い情緒をみせると「ひかれる」(# 68) 不安が強くなることがわかる。さらにThと両親との関係を重ね、両親への思いCI「人と近いのが気持ち悪い、思い出すのは、お父さんとお母さん」(# 73) と煙突の奥へと深まっていく。加えてCIにとって施設にお金を払うことは使用料のような感覚であり、Thとは利益抜き奉仕的な関係を幻想的に描き、そこに現実や生々しさを持ち込まないですんでいたと考えられる。直接Thに払うことで、CIの期待する応えを察してくれる理想的Thとは違うことをより感じ、幻想的な関係が崩れる要因になったと考えられる。料金を直接手渡しすることは、ThとCIを「料金を支払う側と受け取る側に差別化」¹し、不公平感や不満感を漂わせる。それが脱幻想的關係、洞察的關係を促進する効果があると考えられる。Thがしばらく頂いたお金を使わず、隠し持っていたのは、Thにとっても偽りの万能感や幻想的關係の中に隠れることができず、恥の感覚があった。Thにとっても脱万能感、脱幻想的に働いたと考えられる。また、CIが施設に対して治療してほしいとお金を払うことと、Thに直接治療してほしいと手渡すことでは、Th自身がやらないといけないう責任性にも大きく影響した。

ThがCIの心のありようを思い、話を戻したり、話題が変化したことについて訊ねたりしながら深める方向に、自由に語ってもらうことを意識することで、今ここで起きていることから、過去のCIの体験が語られる。例えば、Thが「父親と継母が手をつないでいた」と「父親が継母のことをフォローしていること」(# 140) をつなげ、肩に力のはいった知的な解釈ではなく、自然な解釈ができるようになる。筆者は、解釈とは、びたっとCIの心に響く気の利いたことを言うことだと誤解していたが、心に浮かんだことが解釈であり、伝わるように言葉にするのが「解釈をする」ということだと体験できた。

②治療空間

料金を手渡しで受け取るという治療構造の変化は、

カウンセリングを行う治療空間の意味にも影響を与えた。どことなく第三者がちらつく空間、間借りの時間から、第三者の関与しない自分の空間でCIと会い始めることで、Th「ゆっくりでいいから思い出してみて」(#58)と、ゆとりをもち、Thとの関係性の中で起きる心の揺れ動きや矛盾について想像する余裕が、Thに生まれ始めた。それまで、Thの焦りやCIに不快な内的体験を語らせることでCIが傷つかないか、来談しなくならないかと心配になり、話題を変えたりすることで、CIはCI「わからない」「覚えていない」と答えることが多かった。Thがしっかり責任をもって煙突の奥にすすまない態度から、しっかりとCIの内的体験を浮かび上げさせようと、「CIはどうみえたんだろう?」(#64)、(母親の態度に対して)「どんな意味に捉えたの?」「CIにはどう聞こえたの?」(#84)という態度に変化することで、「妹への嫉妬」(#64)など生々しい心模様を語るようになる。さらにCI「嫌な感情を消そうとせず、極端にならないよう考えている。すぐに行動せず気持ちをみようとする」(#146)と自分の課題を理解し、過食をせず、CIが自ら今起きている感覚の背景に何があるのかを探索しはじめ、CIは混乱した人間関係全体をみつめることができるようになった。

また、個人契約前においてもある程度、心を聴かれ、語ることによって、奥にあるCIの肌レベルでの欲求が高まるが、十分にThによって扱われなかったため、突き動かされるように異性関係が活発になったと考えられる。治療空間のコンテインする力が増すことにより、CIの満たされなさを外で発散するのではなく、カウンセリングのなかでおさめ、言葉で表現することができるようになった。

③面接頻度

頻度に関しても、できるだけ多く会うようにと毎週を基本とすることは、施設や病院のルールで機械的に決められるのに比べて、Thの収入ということもあるが、Thが仕事やプライベートのスケジュールを立てるときから、CIへのところが動く。CIと都合を合わせる時、CIのこころを想像し、カウンセリングよりそっちが重要な?などネガティブな感情もでてくる。それはCIも同じだろう。このようなこころ模様が料金をもらう生々しさの一つで、その生ものを扱うには毎週会うことが必要であった。また毎週にすることで、ThがCIに対して自分を見つめることへのプレッシャーを強めることができ、それを受けて、遅刻やキャンセルが生じる動きがでてくる。#112のあと、カウンセリングが4週あいた時は、継母との関係が出てこず、症状だけは残っており、

時間があくことによって、情動や思考が薄れてしまい、再び‘煙突掃除(chimney-sweeping)’の通りがわるくなった。さまざまな都合はあるにしても、基本的に毎週会うというThの姿勢は、もっと深く、濃く関わりたいというメッセージにもなる。定期的な煙突点検ではなく、日々変化する心の煙突のつまり、そこの温度を感じ、さらに下がどうなっているのだろうと想像する十分な時間がThにもCIにも必要であった。また対面法で行うことで、Thのもの想う姿は、CIにとって自分を見つめるモデルにもなり、自分の考えや行動を客観的にみることができるようになると考えられる。

Yを中心とした人間関係の修正という視点

Yとの関係において、Th「日常生活の不満はもう家庭レベルで、本当の不満はなんなの?」(#181)と、介入することで、「拒否されていない」(#160)と頭でわかっているが、「感情を出してはいけない、自分が間違っている。だから一人ぼっちの感覚になる」(#162)とYとの心のやりとりが固くなっていることに気づく。同時に、Th「Thとの間ではどうなの?」(#162)と、Thとの世界を重ねさせることで、現実のYとの固くなった関係に柔軟さを取り戻した。実際、Yとの関係の「安定度」について「Thとのズレ」(#185)があり、CI「Thの言葉がしっくりこない、いつもの私ならシャットダウンしておしまい」(#185)、「先週のカウンセリングの後さみしかった、ThがY寄りだなと思ってしんどかった」(#189)とThとの間で起きているThへの不満を語り、Thとの関係を見つめなおすことで、CI「思い込み激しくて言えないことが日常でもある」(#189)と、自分の問題として念を押すことにもなった。このような治療構造における技法において、父母の再位置づけが行われ、Yとの関係性が見直される土台となったと考えられる。

Thとの間に漂うものを扱うことは、Thが‘煙突掃除(chimney-sweeping)’を知的に何とかしてやろうとする態度から、CIが自ら‘煙突掃除(chimney-sweeping)’ができるようになる援助をする態度の変化であり、「自由に気楽に、時間をかけながら、自分のペースで自分を語ってもらうことを最優先にする」という形へのThのstyleの変化である。その変化が治療が安定していったものになった。その安定と安心を拠り所にCI「人間関係のこと考えると霞がかかっている」(#44)から、CI「過食して内容覚えているのはじめて」(#139)と変化し、Thが細かく訊ねなくても、CI「カウンセリングで蓋があいて苦しい」(#150)ながらも、心の動きや背景をみつめ、感情を溢れさせ語り尽くすことにつな

がっていった。カウンセリングの最後に、Th「私の中の傷ついた女の子は？」(# 204) という言葉に対して、Clが自然にCl「消えたというか、過去形になった」(# 204) と味わいながら答える姿からは、Thの力のはいった解釈ではClも力があるが、Thの心に浮かぶ解釈はすっと受け入れられやすいのではないかと考えられた。治療構造によって、Thの態度がまず変化し、ThとClの関係性が大きく影響をうけ、Clの変容が促進されることがわかった。このよう心の‘煙突掃除(chimney-sweeping)’ができることによって、Clは継母と妹の関係へのうらやましさを、父親が仕事でいなくてポツンとした傷つき、父親を実母、継母にとられた傷つきを語り、洞察が進み、体験が修正され、心で繋がるYとの関係を再構築し、親と対等の自分の家を築くことができたと考えられる。

ThがClの内的体験に近づこうとThも連想を膨らませ、しつこく介入することは、藤山⁸が述べている「母性的モード」と「父性的モード」を両輪にバランスよくClに迫ることであるといえる。それがClにとっての‘煙突掃除(chimney-sweeping)’にもなり、Clが自ら心の煙突の奥にライトをあて、詰まった情動を見つめなおすことができるようになる援助である。このことは多くの心理療法の原点であり、心理療法の出発点として重要であると再認識することができた。ここからさらに機能する心理療法にしていくための橋渡しであり、より理論的・構造的に深みをもって味わっていくことが課題として残った。

最後に、「何か他の人にももの役にたてたら」と、この事例を論文としてまとめることを快く許可してくれたSさんに心より感謝いたします。

参考文献

- 1 馬場禮子 1999「精神分析的な心理療法の実践」 岩崎学術出版
- 2 馬場禮子 2013「精神分析をどう学んだか」精神分析研究 57 (2) 日本精神分析学会編集委員会編
- 3 Bion,W.R 1962 「Lerning from Experience.Heinmann,London.」 福本修訳 1999 経験から学ぶこと .In 精神分析の方法 I .法政大学出版局 .東京
- 4 Bollas,C 1996 「Figures and their function」 on the oedipal Structure of psychoanalysis.Pschoanalytic Quaterly65.
- 5 プロイア／フロイト 2013「ヒステリー研究<初版>」 金関猛 訳 中央公論新社
- 6 F.Fromm-Reichmenn 1964 「Principales of intensive Psychotherapy 積極的心理療法」 阪本健二訳 誠信書房
- 7 藤山直樹 2003「精神分析という営み—生きた空間をもとめて」 岩崎学術出版社
- 8 藤山直樹 2012「精神療法のスキルとは」精神科 21 (3)
- 9 藤山直樹 2017『「分析的」な関わりとは何か』精神分析研究 61 (1) 日本精神分析学会編集委員会編
- 10 フロイト 1912「分析医に対する分析治療上の注意」 フロイト著作集 9 小此木啓吾訳 1983 人文書院
- 11 Jacoby,M. 1984 「The Analytic Encounter Transference and Human Relationship」 .INNER CITY BOOKS. 氏原寛・丹下庄一・岩堂美智子・後浜恭子訳 1985 分析的人間関係—転移と逆転移—培風館
- 12 平木典子 2006「心理療法の理論・技法の統合を探る」人間関係研究 (5)
- 13 神田橋條治 1990「精神療法面接のコツ」 岩崎学術出版社
- 14 河合隼雄 2010「生きたことば、動くところ」 河合隼雄語録 河合俊雄編 岩波書店
- 15 衣笠隆幸 1990「自由連想と治療回数をめぐる—英国及び日本での経験から」精神分析研究 33
- 16 衣笠健作 2012「聴くことの意味」愛知学院大学「心理臨床研究」第 13 号
- 17 北山修 2017「週一回サイコセラピー序説」精神分析からの贈り物 創元社
- 18 倉西宏 2015「心理療法における『交換』と『贈与』の原理 - 料金を入口として - 」追手門学院大学心の相談室紀要第 12 号
- 19 栗林和彦 2011「心理臨床家の個人開業」遠見書房
- 20 栗林和彦 2019「臨床家のための実践的治療構造論」遠見書房
- 21 松木邦裕 2009「精神分析体験：ビオンの宇宙」 岩崎学術出版
- 22 松木邦裕 2012 「gleichschwebende Aufmerksamkeit についての臨床的見解—精神分析の方法と関連して」精神分析研究 56
- 23 森さち子 2018「治療関係と治療構造」臨床心理学 18 (3)
- 24 村瀬嘉代子 1995「子供おと大人の心の架け橋」金剛出版
- 25 妙木浩之 2018「治療構造論」臨床心理学 18 (3)

- 26 小此木啓吾 2003「フロイトとラットマンのかかわりに
おける治療者の投影同一化と間主観的なコンテクスト
(ストロウ)の共有」精神分析研究 47 (4) 日本精神
分析学会
- 27 大石英史 2015「クライアント中心療法における一致の
臨床的検討 ロジャーズの中核三条件 一致」村山正治
監修 創元社
- 28 ロジャーズ 1942「カウンセリングと心理療法」末武康
弘訳 2005 岩崎学術出版〇〇
- 29 Rogers,C.R. 1957 The necessary and sufficient
conditions of therapeutic personality change,J.consult.
Psychol.,21,95-103. 伊東博訳 1962 治療における人格
変容の必要にして十分な条件 伊東博訳編 カウンセリ
ングの理論 誠信書房
- 30 坂井友美・松下姫歌 2009「holdingの観点からみた心理
臨床面接における枠の機能」広島大学大学院心理臨床教
育研究センター紀要 第8巻
- 31 柴山謙三 1991「心身両面への心理療法(Ⅲ)技法の構
成について」熊本大学教育学部紀要,人文科学第40号
- 32 塩山二郎 2010「夢分析による心理療法の一技法」現代
のエスプリ (516)
- 33 渡辺雄三 2018「クライアントと臨床心理士の心理療法
的關係性 臨床心理士の存在とその関係による心理療
法」人間環境大学附属臨床心理相談室紀要「臨床心理研
究」第12号